

第15話 日本人学校か現地校か

筆者は転校というものを経験したことはありませんが、子どもにとってはとても大きな問題ですね。思い返してみれば、仲の良い友達と離れるのが嫌で、出来れば受験をしたくなかったものです。携帯電話を持っている子などいなかった頃（一応存在はしてはいましたよ、アンテナがビロロンと）、環境の離れた友達と疎遠になっていくのは仕方ないことでしたね。現在は、少し違うのでしょうか。

さて、遠く海外まで連れて来られ、言葉や文化の壁にぶつかり、生き抜いていく子どもたち。と書くのが格好いいですが、案外のほほんとしていますね。子どもは強い。それでも自分の意思とは関係のない苦勞を強いられている彼らには、少しでも進みやすい道を作ってあげなければいけません。もちろん、千尋の谷に突き落とすのも良い一手ですが、選択肢は知っておきましょう。

ここで今回のテーマです。赴任先の地域に全日制の日本人学校がある場合、現地校とどちらを選ぶべきでしょうか。これは当然、どちらが良いというものではありませんので、帰国受験に的を絞って考えてみましょう。

これまでに書いてきたように、英語の優位性から現地校が圧勝かといえば、場合によりけりです。例えば、小学6年生で初めての海外。はじめのうちは、先生が何を言っているのか分からない。ESLに通い、家では宿題...というより辞書と格闘。これでは、受験勉強どころではありませんね。受験まで1~2年という期間では、現地校はデメリットの方が大きいでしょう。これが中学生になると、もっと顕著になります。「数学なんて言っていられない...」ということもしばしば。高校で英語受験は無いに等しいので、死活問題になります。

しかしこれも、目の前の受験を飛ばすことが出来るというのであれば、大きく話が変わります。小学6年生から現地校、高校受験を帰国枠でということであれば、よほどサボらない限り成功するでしょう。このように、現地校で武器を得るにはある程度長い時間が必要です。

では、日本人学校はどうでしょうか。彼らを教えていると、日本の子と何ら変わらないように思いません。実は、大人たちが日本を感じられる一番のことかもしれませんね。勉強面では、現地校と比べ国語はもちろんのこと、算数・数学に差が出てきます。特に受験算数、受験数学は特殊なもので、日本式の勉強でなければ、全く対応できません。また、中学入試は別ですが、高校入試の英語は日本の子を対象にしたものですので、不利になるとも言えません。とはいえ、帰国枠で受験をする以上、ライバルはみんな英語ができます。それではやっぱり不利ではないかと思ったら、少し視点を変えてみましょう。

英語がネイティブ並だとしても、100点以上をとることはできません。ですが、日本語環境だったとしても、80点は遠い話ではありません。この20点差を埋めるのに、国・数の2科目を使えるのですから、あとは言わずもがな、というものです。

このように、現地校でも日本人学校でも一長一短があり、どちらを選んでもやるべきことはあります。ですから、あまり受験、受験で考える必要はありません。

「せっかくの海外なのだから」
大いに賛成です。なかなか得られる経験ではありません。

「やっぱり日本人なのだから」
間違いありません。誰もが気づく日本人のすばらしさ。

こういったことから考えていきましょう。その結果生まれる受験勉強を、全力でやれば良いのです。

